

原教 會議報導

日本文化人類学会第40回研究大会と 映像人類学上映会

日本文化人類學會第40屆研究大會與
影像人類學上映會

山本芳美 日本都留文科大学 講師

石村明子 翻譯

圖片提供 山本芳美 陳景揚



2006年6月3日と4日、東京大学駒場キャンパスにて、日本文化人類学会（旧日本民族学会）第40回研究大会が開催された。6月は学会やイベントシーズンであり、日本台湾学会第八回学術大会は6月3日におこなわれたと聞く。私個人は神奈川県川崎市でおこなわれた、2年に一度おこなわる日本最大級の刺青関係のイベント「刺青祭2006」とその前夜祭の見学のため、両日とも午後には川崎に移動した。刺青に詳しくない人のため、少し説明しておくが、彫師たちがブース内で彫る実演をするかたわら、ステージでラップグループやバンドなどのライブが次々に展

2006年6月3～4日，在東京大學駒場校區由日本文化人類學會（舊稱：日本民族學會）舉辦第40屆研究大會。6月是學會活動的旺季，據說日本台灣學會第八屆學術會議是6月3日舉行的。本人自己要參加神奈川縣川崎市舉行的「刺青祭2006」及前夜祭，此活動每兩年舉辦一次，在日本規模最大的刺青相關活動之一，為了參加此活動，在兩天會議期間本人一到下午就去川崎。本人在此向對刺青不熟的人士說明一下「刺青祭2006」的活動，刺青師在

開するのが「刺青祭2006」である。刺青を中心にフィールドワークをしている者としては、刺青の入った若者たちが2千名以上集まり、120名ほど彫師たちも顔を出す機会を逃すことができず、途中で席を立たざるをえなかったのである。こうした事情を踏まえると報告者として適任ではないが、個人的に印象に残ったことを含めて学会の概要を報告しておく。

今回は250件を超える発表報告の希望が寄せられたこともあり、発表はAからGまでの8会場にわかれた。現代人類学の視点から、東南アジア生態史や呪術などをとらえた11の分科会もおこなわれた。発表時間は質疑応答をふくめ各発表者に20分がわりあてられ、自らが取り組む研究について、実質15分で伝えようとの格闘の跡がうかがえる発表が相次いだ。真剣さに満ちる各会場から、発表の合間に外に向かえば、さわやかな風が吹きわたる駒場キャンパスの広場や周辺のレストランなどで、現在取り組んでいる研究や近況について旧知の参加者たちがくつろいで語り合う姿が見受けられた。発表だけでなく各地から集まる参加者同士の語り合いのなかに、年に一度の「文化人類学者の祭り」の楽しさがある。

攤位裡面實際刺青，同時在旁邊的台上由饒舌團體及樂團等音樂團體進行現場表演。對主要在刺青方面做田野工作的人來說，在此活動超過兩千個有刺青的年輕人聚在一起，大約120名刺青師也會出現，本人無法放棄這個機會，只好研究大會結束之前就離去。

由於這次參加發表的報告者超過250位，發表會場分為從A到G之8處。11個分科會從現代人類學的觀點來看東南亞生態史及巫術等主題而舉行。每位發表者包括問答時間具有20分鐘的發表時間，連續不斷地看到發表人實際上在15分鐘長的時間內盡量要傳達自己的研究成果。到了休息時間，從充滿意氣的各個會場走到外面，在和風吹拂的駒場校區廣場及旁邊的餐廳，參加者們輕鬆愉快地跟舊友談談自己現在的研究及最近的情況。參加大會者除了報告以外，從各地聚集，互相暢談，享受一年一次「文化人類學者祭典」的樂趣。

原教會議報導

4日午前にはB会場にておこなわれた台湾に関する発表を列挙しておく。中村平氏(日本学術振興会、京都大学人文科学研究所)「『困難な私たち』への逆行——接触領域における記憶と歴史の民族誌記述」、原英子氏(岩手県立大学)「台湾総督佐久間左馬太に関する台湾先住民の記憶——タロコ族からみた『太魯閣討伐』」、上水流久彦氏(県立広島大学)「台湾における植民地主義——台北市の古蹟指定をめぐって」となる。

いずれの研究者も留学や調査などを経ており、台湾との関わりが10年を超える研究者である。かねてよりよく知る人々であり、それぞれの視点から台湾に関する充実した見解を述べたはずなのだが、私は台湾関係の発表を聞くことができなかった。今回の大会では、以前にも増して発表者がとりあげた地域またはテーマによりプログラムが編成されていた。同じく午前中にはG会場にて、沖縄関係の研究発表がおこなわれ、私は朝一番に2003年から取り組む沖縄・石垣島のA集落でおこなわれているエイサー(沖縄本島を中心に盆の中日におこなわれる盆踊り)の変容と集落づくりの関係について発表した。私はその後続いた沖縄関係の発表を聴くため、B会場には駆けつ

在此列舉4日上午在B會場舉行相關台灣的報告；中村平(日本學術振興會，京都大學人文科學研究所)發表「逆流而上到『困難的我們』——在接觸領域記述記憶與歷史的民族誌」，原英子(岩手縣立大學)發表「台灣原住民有關台灣總督佐久間左馬太的記憶——太魯閣族觀點的『太魯閣討伐』」，上水流久彦(縣立廣島大學)發表「在台灣的殖民主義——關於台北市的古蹟指定」。

這些研究者都經過留學或調查等過程，與台灣的關係超過10年以上。他們非常熟悉研究對象，我想他們一定從各自的觀點講述有關台灣的見解，內容肯定很充實，但本人無法去聽台灣相關的發表。這次大會根據發表者的研究地區或主題安排議程，比以前更有這樣的傾向。同樣在上午在G會場舉行有關沖繩的研究報告，本人在上午第一個報告，報告內容為本人從2003年研究「沖繩石垣島A聚落的Eisa(在盂蘭盆節正當中的那天舉行，以沖繩本島為中心)之變遷及其與營造聚落的關係」。我因繼續聽相

けられなかった。沖縄と台湾の研究者は、相互の地域を行き来しながら思索を深めていく場合が多く、そうした研究事情がプログラムには反映されていなかったといえるかもしれない。いずれにせよ、きめ細かい配慮が不可能なほど、大会の規模は膨れ上がっているであろう。同じ時間帯に聴きたい発表が重なるのは、約3千名の会員を擁するようになった日本文化人類学会ならではの悩みである。

さらに、3日と4日には東京大学の別棟で、「映像でみる世界の文化——映像人類学上映会」が催され、さらに悩みが深まった。参加者の多くが、日本文化人類学会とおよそ300メートル離れた上映会を行き来したのではないだろうか。こちらの上映作品は、文化人類学会の研究発表と連動した映像記録もあったが、日本国内の祭りの記録や独自の視点に基づいた作品も上映後には、記録者による解説と質疑応答がおこなわれた。台湾に関しては、ヴィジュアル・フォークロアに所属する英国出身のアンディ・リモンド氏による「アラヨの歌——台湾・蘭嶼のシイラ漁」（17分・2006年）が出品された。ここ数年、蘭嶼においてチヌリクランの制作過程の撮影に取り組んできたアンディさんは、あまり記録がなされてこなかったシイラ漁を記録する

關沖縄的報告，因此無法跑去B會場。沖縄及台灣的研究者通常往來兩地而加深思索，這次安排議程也許可以說沒有反映到這樣的研究情況。總之，我認為大會的規模已經膨脹到無法關心一些細節，想去聽的報告時間重疊而讓人困擾，這是擁有高達3千人會員的日本文化人類學會才有的現象。

再者，3日和4日在東京大學的另外一棟還舉行「透過映像看世界文化——影像人類學上映會」，也再給我添加煩惱。我想很多大會參加者都往返於300公尺遠的日本文化人類學會會場與上映會的會場。上映會有的是文化人類學研究報告與影像紀錄連結的，也有的是紀錄日本國內祭典及根據獨自的觀點製作的作品，上映之後由紀錄者解說，以及問答。在台灣方面，屬於影像民俗學的英國人Andrew Limond氏發表「Arayo的歌——台灣蘭嶼的鬼頭刀魚捕撈」（17分鐘，2006年）。在這幾年Andrew先生在蘭嶼致力於拍攝Cinedkeran的製作過程，他

原教會議報導

機会に恵まれたため、この作品を作ったと語った。シイラ漁に従事する1人の男性に密着し、実際に漁をしながら語る姿を捉えた作品は、主な舞台が洋上ということもあり、開放感に満ちた画面構成になっていた。実は当日になるまで上映会が催されることは知らなかったのだが、この作品に出会えたことは一つの収穫であったと思う。

第41回大会は、2007年6月2日（土）と3日（日）におこなわれるという。関係する学会やイベントが、重ならないことを願っている。

参考URL

日本文化人類学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jse/index.html>

国立情報学研究所 学協会情報発信サービス

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/kouen.html#kouen060603-04>

说他遇到紀錄鬼頭刀魚捕撈的機會，之前鬼頭刀魚捕撈的紀錄較少，才製作此作品。此作品緊密跟著一個從事鬼頭刀魚捕撈的男性，拍攝了此人在捕撈現場一邊打魚一邊講述的樣子，由於紀錄片主要舞台在海上，使鏡頭結構充滿自由感。其實本人當天才知道有這場上映會，對我來說遇到這部作品是一種收穫。

據說第41屆大會將在2007年6月2日（六）和3日（日）舉辦。希望相關學會及活動的時間不要重疊。

參考網址

日本文化人類學會

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jse/index.html>

國立情報學研究所 學協會情報発信service

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/kouen.html#kouen060603-04>



▲女性刺青師在「刺青2006」會場實際刺青。 ▲這是第一代北鳳的作品。 ▲刺青師與相關人士拍攝紀念合照。